

前回11月12日に見た記録映画「The Times of Harvey Milk」に関する各テーマに沿った感想への先生のFeedbackと討論

★ Q1) 人物たちの「社会学的想像力」

「性的少数者を差別したり異質なものとみる側がマジョリティで、その反対側にあるのがマイノリティだ」という認識にとどまらず、「そのような現象が起こるのは支配的なイデオロギーが社会に存在するからだ」と気付くことが社会学的想像力である。

マジョリティの人たちは「社会的認識」をもって自分たちを判断する。そのような価値判断をするのが社会学的想像力だとすると、マジョリティ側が持つ社会学的想像力とはなんだろうか。われわれが普段気付いていない社会学的想像力である。自分自身が生きている社会に安住するためには、プライベートがPublicのアジェンダになる、そのメカニズムと意味づけを考えてみましょう、そこにマジョリティ側が持つ社会学的想像力がある。

- ①普通の人たちが普通のことを自明視しているメカニズム
- ②保守派の人たちの社会学的想像力のあり方

Q3) 「カムアウト」の社会的戦略

一回目のレポートの内容は、カムアウトする事を「良いもの」と受け取りすぎている。カムアウトが持っている負の側面も見るべきだ。例えば、カムアウトすることで、“普通”の人間（ヘテロセクシュアル）／ゲイ、レズビアンとの対立が生じるだけでなく、ゲイ、レズビアンの人たちの中でもカムアウトできる（する）人とできない（しない）人との間の対立も生じる。そのような負の側面があるのにもかかわらず、なぜカムアウトする必要があるのかを考えてみましょう。

- ①性的少数者問題におけるカムアウトという戦略の影
- ②カムアウト戦略の不可避性

Q4) 社会という場の性質をPowerに注目

支配する側になるための正当性を示す力となる、規範を作る力になる、われわれが意識しにくい力とは？社会という場の性質に基づいて「これがpowerだ」といえるもの。

学生たちの討論では、「ものごとのあり方に影響を与える、方向付けるものを力と定義」し、そのなかに「制度的なもの、共感性やメリットなどの魅力、暴力的なもの」などをあげた。

先生は「多数」と「力」の変換性を指摘。

★課題：先生のFeedbackを参考にもう一回考えたうえで、2回目のレポートを書き込みます。